

言葉の力 (中ノ一)

高橋 達明

III

内容的類型学の構想に関して、具体的なあれこれの点にもまして注目されるのは、活格言語を言語類型の一つに定立し、それを、他の二つの類型、対格言語と能格言語に先行する類型として通時的に位置づけるという歴史の枠組の設定であろう（類型の変化には、前稿でふれたように、活格言語>能格言語>対格言語の線と、もう一つ、たとえば前印欧語の場合のように、活格言語>対格言語という、能格言語を介さない線とがある）。コムリーもクリモフの『能格性の一般理論概説』（1973）の書評で、そのことをまず指摘している（Comrie, 1976:25）。そして、この言語発達史の構想—能格言語の起源を研究する過程で生まれた、活格言語を類型として独立させるという構想はクリモフの1972年の論文ではじめて発表されたといわれる（クリモフ, 1999:2）。幸い、それが英訳されているのを見ると、著者はまずはじめに活格類型の意味的決定因子 semantic determinant を活性 active 原理と不活性 inactive 原理との対立にもとめてから、この対立に呼応する「特徴」を、順を追って説明している（Klimov, 1974）。その説明は、1977年の著書の序に掲げられた、活格言語についての「簡単な定義」と基本的に変わらない（クリモフ, 1999:1）。すなわち、活格言語では、対格言語、能格言語で決定因子として作用している主体（主語）と客体（目的語）との原理的対立がいまだ働かないで、すべてが活性と不活性との対立を実現することに向かっているという。まず、語彙のレベルで、1）名詞が活性類（有生類 animate）、不活性類（無生類 inanimate）の二項に区分され、2）動詞も、活格動詞 active verb と状態動詞 stative verb

に区分されること、ついで、統語のレベルでは、3) 動詞の性質に応じて、活格構文と不活格構文が成立すること(ここでは、他動詞と自動詞という対立がなく、したがって、受動態も存在しないが、求心相と遠心相=非求心相が対立すること)、そして、形態のレベルで、4) 活格と不活格の二系列の動詞人称接辞の対立、あるいは機能的にそれに等しい名詞の活格と不活格の対立が発達すること。以上が活格言語を特徴づける主要な事実であり、クリモフの用語にいう包含事象 *implication* の主たる項目の提示である。活格言語の包含事象のより網羅的な説明は著書の結語の章に見られる。

包含事象は言語類型のそれぞれが具えている本質的な原理の現れであり、対置される随件事象 *frequentalia* とともに、語彙と文法(統語論、形態論)の基本特徴の相関的複合にもとづいた枠組であるが、分類の指標として見るならば、両者あいまって、言語類型の通時的変化を記述するための概念装置である¹⁾。したがって、これらの装置が能格言語の設定にも対格言語の設定にも適用されるのは言うまでもない²⁾。

クリモフによれば(1999: 2-5)、活格類型に属する言語は、現在のところ、北米、南米のインディアン諸語に確認されるだけである。北米では、まず、ナ・デネ語族。これはサピアの命名による同系言語で、アサバスカ語族(ナバホ語を含む)、イーヤック語、トリンギット語からなる。さらに、スー語族(ダコタ語を含む)、マスコギ語族、イロコイ語族(セネカ語を含む)、カド語族(アリカラ語を含む)。南米では、トゥピ語族(ワラニー語を含む)。以上であるが、今後、他の地域、たとえばインドネシア、メラネシア、あるいはオーストラリアでも見出される可能性が指摘されている。また、エラム語のような近東の古代語についても、活格言語の特徴をそなえていたとされる。

上記の言語の歴史的な位置について(クリモフ、1999: 55, 57)。ナ・デネ語族は活格言語の初期の状態にある。「活性原理と不活性原理の対立が、多くの点で有生・無生原理の対立に近い」こと、活格類型の包含事象のうち一部が欠如していること(情緒動詞類および複数一人称名詞の内包形、除外形の区分がまだ現れていない)、その他による。活格性の基準に完全に合致する代表言

語はトゥピ・ワラニー諸語である。ただし、パラグアイの national languages の一つであるワラニー語の場合のように (Jensen, 1999:127), ずれはあるという。そして、スー語族からカド語族までの北米インディアン諸語は比較的後期の特徴を表していると言われる。

そこで、ワラニー語について、活格言語の特徴を、クリモフも参照している、グレゴレスとソアレスの『口語ワラニー語の記述』によって具体的に見ておくことにする (以下、『記述』という)。

まず、名詞について。名詞は、それが他動詞の目的語になるとき、後置詞を必要とするか、しないかによって、二つのクラスに分かれる。後置詞 *pe* は、次の例文から明らかのように、目的語が人間である場合に、また時として動物である場合に目的語の構造体に現れる。(Gregores & Suarez, 1967:136. 156)

- | | | | |
|-----|--------|---------|-----|
| (1) | a-hešá | ne-rú | pe |
| | 私は一見える | 君の一父 | 後置詞 |
| (2) | a-hešá | ne-róga | |
| | 私は一見える | 君の一家 | |

クリモフがこれを名詞の活性類と不活性類の対立にもとづく現象と解していることはいうまでもない (1999:133)。

ただし、この「規則」には、いくつか例外もあるとされ、『記述』は次の一例を引用している。

- | | | | |
|-----|---------|---------|-----------------------|
| (3) | a-haihú | še-retá | mě |
| | 私は一愛する | 私の一国 | 後置詞 (<i>pe</i> の異形態) |

『記述』の語彙集によれば、*etá* は nation, country の意らしいが、これが古く土地 (故郷の) を指すなら、その有生性あるいは人格性をめぐって、示唆するところがあるかもしれない⁸⁾。

名詞には、数の区別がない。複数をとくに表すには限定詞をそえる。性、格の区別がないのはむしろである⁴⁾。性は能格言語の随件事象で、対格言語に及び、他方、格組織は能格言語の包含事象（能格，絶対格，斜格）であり、対格言語でもそうである（主格，対格，斜格）。

次に動詞について。グレゴレスとソアレスは、当然ながら、ワラニー語を活格言語という視点から記述しているわけではないので、動詞については、上の他動詞の目的語という用語にもうかがわれるごとく、まず、統語論的に他動詞，自動詞の区別を立てるが、さらに、接辞による屈折という形態論的現象にもとづいて、動詞を三つのクラスに区分している。屈折接辞 *inflectional affixes* は人称指示，主語，目的語，再帰，相互，願望，命令の七通りあり，動詞はそれぞれの接辞とどう組み合わせるかによって，三つのクラス，1) 性質動詞 *quality verbs*，これは人称指示と願望の接辞によって屈折する，2) 自動詞，これは主語，願望，命令の接辞によって屈折する，3) 他動詞，これは主語，目的語，再帰，相互，願望，命令の接辞によって屈折する，のいずれかに配分されることになる⁵⁾。(Gregores & Suarez, 1967:130-32, 137-39)

動詞の三クラスは，Jensen (1999:146) の分類では，1) 状態 (*stative*) の自動詞，2) 動作 (*active*) の自動詞，3) 他動詞となる。

接辞は，人称指示，主語，目的語以外の四つは，願望の *ta*，再帰の *ye*，相互の *yo*，命令の *e* のように，形態素が一つに決まっているが，はじめの三つは人称，数，等によって変化する。それを，人称指示の接辞から，表にすれば，

表1 人称指示

	人 称	単 数	複 数

I	še	yane ore
II	ne	pene
III	i(φ)	

多数にのぼる異形態は三人称のゼロ (φ) を除き、すべて省略してある (以下、同じ)。一人称複数の yane は内包形 (聞き手を含む), ore は除外形。この対立は活格言語の包含事象である。

この人称指示の接辞は名詞に前置されると、所有を表す機能を与える。例文(1)と(2)の ne, (3)の še を参照⁶⁾。

例文(1), (2), (3)の他動詞の構文の主語 a は、次の表に出る。

表2 主 語

I	a	ya ro
II	re	pe

III	o
-----	---

一人称複数はやはり内包，除外の二形をもっている。

次は目的語の表。二人称がさらに複雑になる。

表3 目的語

I	še	yane ore
II	ne ro	pene po
III	φ	

二人称単数，複数がそれぞれ二つの形をもつのは，ne と pene は，主語が三人称（単，複）の場合，ro と po は，主語が一人称（単，複＝除外形）の場合の形である。三人称はゼロ。接辞として表現されるのは，原則として，主語か目的語のいずれか一つであることがわかる。

ここで表1と表3を比較すると，両者は部分的に重なっている。表1の一，二人称の五つの接辞（三人称のゼロを加えれば，六）である。その重なりを表にすると，

表 4

I	še	yane ore
II	ne	pene
III	φ	

すなわち、これらの接辞は、1) 性質動詞の主語の人称、数を示すとともに、2) 他動詞の構文では、目的語になる。次に、例文を対照的にあげる。

(4) še-manuʔá

私は一覚えている

še-peté

私を一打つ (彼, 彼ら, 君, 君たちが)

(5) yane-manuʔá

私たちは (君を含む) 一覚えている

yane-peté

私たちを (君を含む) 一打つ (彼, 彼らが)

(6) ore-manuʔá

私たちは (君を除く) 一覚えている

ore-peté

私たちを (君を除く) 一打つ (彼, 彼ら, 君, 君たちが)

(7) ne-manuʔá
君は一覚えている
ne-peté
君を一打つ (彼, 彼らが)

(8) pene-manuʔá
君たちは一覚えている
pene-peté
君たちを一打つ (彼, 彼らが)

三人称の i は他動詞の構文でゼロになる。

(9) i-manuʔá
彼 (彼ら) は一覚えている
o-peté
彼 (彼ら) は一打つ (彼, 彼らを)

他方, 性質動詞以外の自動詞の主語は, 他動詞と同じく, 表 2 からえられる。

(10) a-pái
私は一目覚める
(11) re-yenó
君は一横になっている
(12) o-ké
彼 (彼ら) は一眠っている

以上の例文に見られる対立, すなわち(4)~(9)の「性質動詞」と(10)~(12)の「自動詞」との対立は自動詞分裂の典型的な事例である。サピアの代名詞類による分類では, タイプ 2 (例はダコタ語) に相当する (Sapir, 1917:86)。そこで,

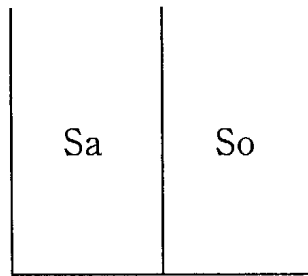
前号の論文の注9) にあげた自動詞分裂の図をもう一度かかげれば、

他動詞 →	A	O
自動詞 →	Sa	So

クリモフの内容的類型学からこの図を見るとすれば、他動詞、自動詞の表記は不要であり、表記を消去して、他動詞、自動詞は意味論的に、意味上の他動詞、自動詞ととらえかえせばよい。そうすれば、 $Sa=A$ 、 $So=O$ という二項の対立が現れ、 Sa は活格動詞の主語となる人称接辞を、 So は不活格動詞（状態動詞）の主語となる人称接辞を表現していることが一目瞭然になる。つまり、ワラニー語におけるように、いわゆる他動詞と自動詞は活格動詞として同一の主語の接辞のもとに現れ（ $Sa=A$ 、表2）、他方、性質動詞は状態動詞として、活格動詞のそれとは異なる接辞のもとに現れるが（ So 、表1）、同時に、その接辞はいわゆる他動詞の目的語のそれと同じものになる（ $So=O$ 、表4）。すなわち、

活格言語

A	O
---	---



この図は、ディクソンが Split-S system の図としてかかげているものにほぼ等しい (Dixon, 1994:72)。

かくして、ワラニー語は動詞に関しても、語彙のレベルであれ、形態のレベルであれ、活格類型の包含事象を提示していることがわかる。

さらに、意味の分布を見るために、クリモフが例示しているワラニー語の動詞を再整理し、『記述』によって増補すれば、次のようになる (クリモフ, 1999:70-71)。

活格動詞 (他動詞) 一打つ, 殺す, 食べる, 歌う, 下ろす, 送る, 教える,

つかむ, ふれる, 結ぶ, 与える

一見える, 聞こえる, 愛する, 知っている

(自と他) 一話す

(自動詞) 一目覚める, 横たわる, 眠る, 笑う, 死ぬ, 落ちる, 座

る, 叫ぶ, 走る, 泳ぐ, 働く, 煙草をすう

一雷が鳴る, 稲光りがする, 雨が降る

状態動詞

一覚えている, 震える, 病んでいる, という名である,

悪臭がする, 縮む, 汗をかく, まどろむ, 広がる, 忘

れる, 渴いている, 空腹である, 丸い, 強い, 鋭い,

老いている, 喜んでいる, 困っている, 可能である

(状と自) 一音がする

(付加的) 一短い, 長い (高い), 暗い, 美しい, 新しい, 青い,
赤い

活格動詞は行為(動作)動詞であり, 有生名詞に結ばれる。「見える」の系列は情緒動詞 *verba affectuum* である。状態動詞は, 一方で, 有生名詞の不随意的な状態を表すものと, 他方, 無生名詞を主語とすることの多い典型的な状態動詞とに分かれている。こちらは名詞に付加されると, 形容詞の働きもする。ワラニー語の品詞には, 形容詞が欠けているが, 活格類型では一般にそうであるとされる。形容詞の欠如は活格言語の包含事象である。そこから, 連結詞 *copula* が存在しないという現象も出てくる⁸⁾。連結詞がないので, 文はいわゆる名詞文の形をとる。これもまた, 活格言語の包含事象である⁹⁾。

さらに, 気象にかかわる語が行為動詞として用いられることに注意したい。これは活格言語に共通するかに見える現象で, ナバホ語に係わって, のちに述べるところがある。

クリモフによれば, 活格動詞と状態動詞の語彙の構成は活格言語を代表する言語のあいだでかなり一致しているが, 法則的な差異もあり, 初期のものほど, 意味的に状態動詞であるものが活格動詞に属しているといわれる。たとえば, 「横たわる」はワラニー語では活格動詞だが, ダコタ語では状態動詞であり, また, 「殺す」, 「死ぬ」は前者では活格動詞だが, 後者では, 「殺す」は活格動詞, 「死ぬ」は状態動詞に入るといふ。なお, 活格言語では, 本来的に, 他動詞(殺す)と自動詞(死ぬ)の区別は関与的でないから, 能格言語の可変動詞のように, これらの意味が一つの語によって表されても不思議ではないとされる。

『記述』の語彙集に収録されている動詞は, 番号を付されている単語, 1130語のうち, 432語にのぼるが, その内訳は, 活格動詞が246語(他=122, 自=120, 自他=4), 状態動詞が180語, その他, 自と状態とにまたがる動詞が5語, また他と状態とにまたがる可変動詞が1語(*moná*: 泥棒である, 盗む)である。状態動詞の割合が意味上の自動詞に比して大きいことがわかるが, それ

は、ワラニー語において、いわゆる性質動詞の生命力がなお旺盛であって、まったく化石化していないことを示している。

最後に統語論、とくに基本語順をめぐる問題にふれておきたい。活格言語における語の線状化の研究はまだ進んでいないようだが、語順の優勢的なタイプは、能格言語と同じく、S(O)Vの型である(クリモフ, 1999: 101)。したがって、O(クリモフの用語では、近い補語あるいは遠い補語)をもつ活格構文については、SOV型と言ってよい。この型は、周知のように、バスク語のような能格言語にも、日本語や古典ラテン語のような対格言語にも広く見られるので、活格言語の包含事象では当然なく、個別の言語類型を越える、まことに大きい射程をそなえた特徴と言わなければならないが、泉井久之助のいわゆる動詞の非主体性(泉井, 1956: 166)、動詞が主語とではなく、補語と結びついて使用されるという、そのあり方から考えてみても、SOV型の来歴は古いものと思われる。少なくとも、松本克己がその「主語解体論」(松本, 1991: 35)で指摘しているように、SAE(標準ヨーロッパ語)に特徴的な(あるいはSAEにのみ特徴的な)「主語の義務化」、文には必ず主語がなければならないという制約は、これらの言語(ゲルマン語の英, 独, 蘭, 北欧語, ロマン語の仏とロマンシュ語)にあって、SVO型の語順が定着し、それと平行して、形態法が動詞の人称語尾と名詞の格の単純化あるいは消失という形に変化したことの結果であるとするなら、この主語優位性 subject-prominency という言語史的現象を、泉井のごとく、人間の精神の反映たる「言語における主体性確立の歴史」と表現することができるかもしれない(泉井, 1956: 152)。この謡い文句には、第二次大戦後の啓蒙的な文章という執筆事情に由来する単純な類型化がうかがわれたいではないが、全体として、ここに、大きい課題がひそんでいることは疑いない¹⁰⁾。それについては、いずれ本稿の結論で扱うことにして、とりあえずワラニー語にもどり、松本が作成した、1408にのぼる世界の諸言語の語順のタイプに関するデータに注目したい(松本, 1987)¹¹⁾。データは1) 基本語順(SOV/SVO/VSO/VOS/OVS/OSV)、ついで、基本語順の型と相関すると考えられている他の三つの特徴、すなわち、名詞(N)に対し

て、2) 接置詞は前置 (PR) か後置 (PO) か、3) 属格 (G) の位置は G—N か、N—G か、4) 形容詞の位置は A—N か、N—A か、という四項目からなる。まず、1) の語順については、ワラニー語は SVO 型という予想外れの結果が出ている¹²⁾。そこで、文例を、『記述』の第三部「文法」の末尾に収録されている四種のテキスト (会話文、寓話、応答文、会話体の物語) について見ると、やはり、O のある平叙文は SVO 型がほとんどで (ただし、無主語文が多い)、SOV 型は二例だけであることがわかる。本文にすでにあげた文例の (1), (2), (3) も前者の例 (無主語文) であるが、テキストから主語のある例を引けば、

- (13) okaraigwá o-yeʔé avà-yeʔé mē manté
 田舎の人 彼は一話す アバ・ニェエン 後置詞 だけ
 田舎の人はアバ・ニェエン語だけを話す

avà-yeʔé は avà (人間) + yeʔé (言葉) で、みずからの部族の言語、すなわちワラニー語を指す。また後者、SOV 型の二例は、興味深いことに、所有動詞と思われる rekó を動詞としている。これは無主語文である。

- (14) ipé, rigwasú, entéro maʔé, entéro animál a-rekó
 アヒル 雌鳥 すべての物 すべての動物 私は一もっている
 アヒルも雌鳥も、すべての物、すべての動物を私はもっている。

entéro (Sp. entero), animál (Sp. animal) はスペイン語の借用語。なお、この動詞については、注 9) を参照。

しかし、ワラニー語は他の特徴については、2) 接置詞は名詞に後置 (PO)、3) 属格は名詞に前置 (GN)、4) 付加形容詞は名詞に後置 (NA) という、SOV 型と相関する結果を示している。OV 型の特徴の基本的な組み合わせが、OV・PO・GN・AN (/NA) であるのに対して、VO 型のそれは、VO・PR・

NG・NA である（松本，1987：17）。したがって，予想と食い違っているのは語順のみであり，この結果は，スペイン語の統語構造が口語ワラニー語の語順に影響を及ぼしたという推定によって解釈できるであろう。内容的類型学はこの立場のようである（クリモフ，1999：102）。活格言語において活格構文の基本語順はかくして S(O)V 型である。

クリモフは活格言語の共通の特徴として，なお抱合 incorporation の現象に注意している。その例は『記述』にあがっているもので，一つは「名詞語幹＋他動詞語幹で形成される複合形の自動詞」の例，もう一つは「名詞語幹＋性質動詞語幹で形成される複合形の性質動詞」の例で，名詞が身体部分を示す語である場合が多いという（Gregores & Suarez, 1967:125）。いま前者を引用する。

(15) akà-yohéi

頭—洗う

(16) akà-yeká

頭（首）—折る

すなわち，akà は，意味論的に，それぞれの動詞の近い補語（直接目的語）にあたるので，OV の語順が守られていることがわかる。

さて，パラグアイのワラニー語は中南米のインディアン諸語のうちでは，唯一，標準語に近い地位を得ている言葉である（Di Pietro, 1968:403）。六十年代はじめの統計では，住民の四割が母語とし，五割強がスペイン語とのバイリンガルであるという。スペイン語の影響が著しいことは推測にかたくなとはいえず，往時の活格類型の特徴を顕著にそなえた言語が現代社会に生きているという事実を驚きを禁じえない。この事実の意味を明らかにすることが，本稿が全体として目指すところであると言ってもよい。

(juillet-août 2005)

註

- 1) 包含事象がある一つの言語類型に固有の分類形質 (特徴) であるのに対して, 随件事象は 1) 先行する言語類型の分類形質が残滓として保存されているか, 2) 将来に後続する言語類型の変化の特徴を先取りする形で表現するに至っているかのいずれかのケースと解釈されるので, 随件事象の検討によって, 言語類型の発達の歴史を構想することができる。この歴史は一方向的である (この点には, 当然ながら, 批判がある)。1) の例をあげれば, 活格類型の随件事象として, 名詞の類別構造 *class structure* の名残りが初期活格言語に認められ, これを各方面から検討すると, 活格類型に先行する類別類型という言語類型がえられる (クリモフ, 1999: 243)。クリモフのこの類別類型の仮説を, アフリカのバントゥー諸語の名詞類別組織の検討によって批判した論文として, 越智 (1998) を参照。2) の例については, 本文にふれた, 活格>能格>対格という類型の変化, あるいは活格>対格という直接の変化があげられる。能格言語を中間段階とする見方をめぐっては, Klimov (1979), および Comrie (1976: 252-260) と Dixon (1994: 185-186) を参照。
- 2) いま能格言語の包含事象をあげれば, 語彙のレベルでは, 1) 名詞が, もっぱら状況により主語と目的語のクラスに配分されること, 2) 動詞の他動詞と自動詞への語彙化原理, 統語のレベルでは, 3) 能格構文と絶対格構文の相関, そして, 形態のレベルでは, 4) 動詞人称接辞の能格, 絶対格の系列の対立, あるいは, 名詞の格標示の能格と絶対格の対立である (Klimov, 1977: 74-75)。なお, Klimov (1979: 330-331), 山口 (1994: 520) を参照。
- 3) 土地の有生性 (人格性) はともかくとしても, オーストラリアのアボリジニが土地とその風景に対してもっている宗教的帰依に似た思考と感情の働きを, 狩猟採集民であったかつてのワラニー族の世界の見方に思いみるのは, 光と闇, 天と地の分離にはじまる神話的創世以後の時間を生きるために, 人間は, 地上に方位と聖俗の境界を定め, ついで暮らしの場を決めるという空間の確定の事業をまずなさねばならなかった以上, 決して当を失したことはない。しかし, いかんせん, 手元に資料がない。それでも, クラストルの著書を見ると, 空間が光に満たされることと *logoshère* (言語界) の成立とが密接に関連している様子をうかがうことができる。それは印欧祖語において, 語根 **bha-* が「輝く」と「話す」の二つの意味をあわせ持っていて, そこから, たとえば Skt. *bhâ* (光), *bhâsh* (話す), *bhâshâ* (言葉), Gk. *φάος* (光), *φημί* (言う), *φωνή* (声, 言葉) のような語が生まれたという事実によく対応している。いま「言葉の根拠—人間」と題する第二章から聖歌の一つを訳しておく。この書には, 残念ながら, ワラニー語の原文が出ていないので, フランス語から (Clastres, 1974: 28),

来るべき言葉の根拠を広げ,

集めるものである一を知ってから、
事物についての神の知、
事物を広げゆく知によって、
彼はほとぼしらせる、ただ一人、
聖なる歌の泉を。
地はいまだ存在せず、
原初の夜があまねき、
事物についての知はない、
そこで彼はほとぼしらせる、ただ一人、
聖なる歌の泉を。

クラストルはこの歌に注して、「聖なる歌」の聖なるゆえんを、神性をもった人間が神々に向けた言語であるところにもとめている。しかし、この歌では、むろん、根拠としての言葉、いまだ根拠にすぎない言葉は、彼、すなわち唯一の存在者、すなわち神ンナマンドウの支配のもとにある。人間はこの後いずれの時にか、聖なる歌の言葉を授けられ、そして、明るい大地に出現した。人間は言葉をもつことによって神的な本質をそなえた存在となる。ここに認められるのは、神が、原初の夜に、ほとぼしらせる泉の歌は祭式に歌われる *sacred song* の原型であるという歴史の構想である。*sacred song* がただちに *yeʔé porá*, 美しき言葉, 善き言葉, 正しき言葉であることになる。*yeʔé* はワラニー語の「言葉」(『記述』の語彙集の表記による、クラストルでは *ñe' è*) で、これは同時に言う、語る、話すという動詞でもある。この語について、クラストルは「それは語、言葉のみならず、われわれの言語にいう魂、精神をも意味する。つまり、一人の人間を人格として構成するものであり、神々から発して、住処と定められた身体に住みつきにくるものである」と述べている。このような拡大解釈が許されるとするなら、それは、ともかく、言葉が人格の中心にあるからである。この章の他の歌には、神について、「言葉の根拠を／彼は広げ、みずから広がりつつ／それ(言葉の根拠)を自身の神性とする、われらの父は」という数行も見える。いずれも、言語道具説の跋扈する今日にあって、言葉の力についての反省を強く誘う詩句である。なお、第二章の歌の原文は、正確には、ンビヤ語(Mbya)であるかもしれない(これはカイワ語の方言とされ、ワラニー語その他とならんで、トゥピ語族に入る)。

- 4) Jensen (1999:148-49) がトゥピ・ワラニー祖語に関して、子音で終わる名詞につく *a nominal case suffix (-a)* のほかに、四つの斜格 (*attributive case+3 locative cases*) を格として記述していることを付記する。
- 5) 人称指示, 主語, 目的語の接辞はそれぞれ自動詞の主語, 自動詞と他動詞の主語, 他動詞の目的語を示すけれども, それは, 屈折接辞という命名に表れているように,

あくまで、動詞の活用に類する形態論的現象と考えられている。事実、主語となる人称代名詞は別にある。šé (私は), né (君は), yané (私たちは, 内包形), oré (私たちは, 除外形), peé (君たちは)。三人称には、指示代名詞の haʔé を代用する。『記述』から一つ例文をあげれば,

šé la gwarani gi na še-resarài moʔá i voi
 (I the Guaraní from not I-forget Mode=Intention not soon)
 私はワラニー語をおいそれとは忘れません

文頭のšé は一人称単数形の動詞 še-resarài の主語。性質動詞の語幹 esarái は後置詞 gi (=gwi) を伴って属詞をとる。la はスペイン語の冠詞の借用。

しかし、以下の本文中の例文のように、無主語文もむろんある。

- 6) ワラニー語では、不可譲渡所有と可譲渡所有の区別は明確ではないようだが、名詞の下位クラスとして、*possessed nouns* の存在が指摘されている (Gregores & Suarez, 1967: 137)。これは身体の部分と親族の名称を表す名詞で、使用にあたって、人称指示の接辞を「ほとんど常に」伴うという。例, še-pó (私の手), ne-pó (君の手)。しかし、「それは絶対的な規則ではない。」あるいは、古典ワラニー語では、区別はもっと顕在的であったかもわからない。ともあれ、被所有名詞の接辞は、以下の本文に見るように、不活格系列の動詞の人称接辞と同じものであるから、内容的類型学という有機的所有の接辞のあり方に一致している (クリモフ, 1999: 124)。
- 7) 例文には現在形しかあげていないが、時制, アスペクト, 等は多くの Modifiers によって示される。
- 8) ワラニー語には、スペイン語の存在動詞の分化形のうち, estar にあたる語はあるが (í=to be, to be at), 連結詞 ser にあたる語はない。名詞文の例文を引けば,

šé katù po-henóí va
 (I certainly you-call Nominalizer)
 確かに私はあなたが呼んでいるものです
 ko kisé ne-maʔé
 (the knife thy-thing)
 このナイフは君のです

上は一人称の例, 下は三人称の例。ワラニー語では、名詞文が全人称に許されることがわかる。

なお、指示代名詞 haʔé (とその否定形 nahaʔéi) がちょうど中国語の「是」の

ように連結詞として機能するという。否定形の例をあげれば、

kóva ko situró naha?éi ne-ma?é
(this-one this belt is=not thy-thing)
このベルトは君のではない

名詞文、連結詞の動詞形の諸相、連結詞としての代名詞の発展については、Benveniste (1966: 151-167) を参照。

- 9) 活格言語の包含事象として重要な求心相、遠心相については、その現れが再帰指標という認定をうけることが少なくないとされるので (クリモフ, 1999: 117), ワラニー語の屈折接辞のうち再帰の接辞 *ye* があることをあらためて指摘しておく。

さらに、所有動詞 *verba habendi* について。いわゆる《have》動詞はその擬似他動詞性、世界の言語に稀なこと、印欧語でも獲得が遅いこと、等の特異性によって注意されてきたが (Cf. Benveniste, 1960: 194-195), 内容的類型学はその欠如を活格類型の語彙上の包含事象と見なしている。活格言語では、所有動詞が形成されておらず (山口, 2003), ワラニー語についても、他の多くの言語の場合と同様《be》動詞 (Lat. *mihi est*) をもちいるという。すなわち, *hú-ikú* (ある, いる) に接頭辞 *r-* を付した *hú-rikú* (と共にある, 持つ) で表現する (クリモフ, 1999: 82)。

しかし、本文の例文(14)に見える動詞 *rekó* はやはり所有動詞であると思われる。そこで、この動詞の出自について、なんらかの説明が必要であろう。例をもう一つ引く。

na a-rekó i tiépo a-perdé vará
(not I-have not time I-waste Nominalizer)
私には無駄にする時間はない

tiépo (Sp. *tiempo*) と *perdé* (Sp. *perder*) は借用語であるが, *rekó* はそうではない (Cf. Jensen, 1999: 149)。さらに、こんな合成語もある。

la h-emi-rekó
その 彼の—対象—所有している
彼の妻

- 10) 松本克己 (1975) によれば、印欧語の中でもっとも早い時期に SVO 型に移行する傾向を示したのはギリシア語であり、その傾向はラテン語、ロマンス語へと引き継

がれるので、ギリシア語の役割は小さくないという。松本論文は印欧語における一連の変化の言語学的説明を提示したものであるが、さらに広い文脈では、ギリシア語の語順の変化は都市（ポリス）の誕生と都市の政治的道具としての言葉の徹底的重視、という精神史的事実と明らかな相関関係にあると思われる。

- 11) この数は松本 (1992) では1563に増補されている。注10) に関連して、この論文で注意されるのは、中国語の SVO 型をクレオール化の結果とする指摘である。
- 12) 予想外れといっても、すでにグリーンバーグの表 (付録Ⅱ) でも、ワラニー語は SVO/PO/GN/NA の第16番に入っている (Greenberg, 1963: 67)。

参考文献 [前号の論文の参考文献に掲載されている文献は省略]

[言語学]

- Benveniste, E. 1960. 《Être》 et 《avoir》 dans leurs fonctions linguistiques. In: *Problèmes de linguistique générale*. Gallimard. 1966. 187-207.
- Comrie, B. 1976. Review of G. A. Klimov, *Očerok obščej teorii èrgativnosti* (Outline of a general theory of ergativity). *Lingua*. 39. 252-260.
- Klimov, G. A. 1974. On the character of languages of active typology. *Linguistics*. 131. 11-25.
- Klimov, G. A. 1977. On the Notion of Language Type. In: *Theoretical Aspects of Linguistics*. USSR Academy of Sciences. 70-77.
- Klimov, G. A. 1979. On the Position of the Ergative Type in Typological Classification. In: Plank, F. ed. *Ergativity-Towards A Theory of Grammatical Relations*. Academic Press. 327-332.
- Klimov, G. A. 1986. On the Notion of Language Type. In: Lehmann, W. P. ed. *Language Typology 1985*. Benjamins. 105-110.
- 泉井久之助. 1956. 『言語の研究』有信堂.
- 越智誠一. 1998. 名詞類別組織をもつ諸言語の構造によせて—内容類型学的観点から—. *Dynamis*. 2. 80-92.
- 松本克己. 1975. 印欧語における統語構造の変遷—比較類型論的考察—. 『言語研究』68. 15-43.
- 松本克己. 1987. 語順のタイプとその地理的分布. 『文藝言語研究—言語篇』12. 筑波大学. 1-114.
- 松本克己. 1988c. 印欧語の語順のタイプ. 『言語』17: 4. 88-93
- 松本克己. 1988d. 語順のタイプと線状化の原理. 『文藝言語研究—言語篇』15. 筑波大学. 1-67.
- 松本克己. 1991. 主語について. 『言語研究』100. 1-41.
- 松本克己. 1992. Distributions and variations of word-order—A typological and

- areal study—, *Kansai Linguistic Society*. 12. 155-164.
- 山口巖. 1994. 活格言語・能格言語・対格言語. 『ことばの構造とことばの論理』日本古代ロシア研究会. 1998. 516-521.
- 山口巖. 2003. 「もつ」の言語・「ある」の言語. 『言語』32 : 11. 30-37.
〔ワラニー語〕
- Clastres, P. 1974. *Le grand parler-Mythes et chants sacrés des Indiens Guarani*. Ed. du Seuil. (邦訳. 1997. 毬藻充訳. 松籟社)
- Di Pietro, R. J. 1968. Bilingualism. In: Sebeok, Th. A. ed. *Current Trends in Linguistics. IV: Ibero-American and Caribbean Linguistics*. Mouton. 399-414.
- Gregores, E. & Suarez, J. 1967. *A Description of Colloquial Guarani*. Mouton.
- Jensen, Ch. 1999. Tupi-Guarani. In. Dixon, R. M. W. & Aikhenvald, A. Y. ed. *The Amazonian Languages*. Cambridge University Press. 125-163.